

2 ディック・ターピンのバラッド

日暮れ前に昇った月が
黄昏ゆくロンドンの街並みをそっと見下ろしていた

足を引きずった野良着の男がニューゲートのそばを
カントリー・ソングを鼻歌まじりに歩いていた

男は藁^{わら}を啜^{すす}えたまま足を止め
張り出された手配書をじっと見つめた

5

罪人ターピンの首に金貨三百枚
生死は問わず
相棒トム・キング付きならば 更に金貨百枚

男は屈みこんだ その様は今まさに飛びかからんとする虎のよう

10

男は顔を上げたが すぐに下を向き
いかにも田舎回りの道化師といった風情でにやりと笑った

その男ディック・ターピンは痛そうに足を引きずって
定宿に向かった 宿の名は^{かいぼてい}飼葉亭

・ ・ ・ ・ ・

馬小屋の中ではディックの愛馬ブラック・ベスが独り
物言えぬもどかしさに頭を上げた

15

見知らぬ男が五人 中庭から侵入し
ベスを舐め回すようにじろじろと見ていったからだ

男たちはひそひそと話しをしながら出て行った
黄昏がまるで死界のように辺りを静かに包み込んでいった

20

だがピロードのようなベスの耳はピクリと動き
聞き逃しはしなかった 奴らはそこにいる まだそこに

奴らは待ち伏せしている 誰を 何のために
時計が四時を打った 足音が近づいてきた

キングだ トム・キング ディック・ターピンの相棒 25
黒馬ベスは嘶いた 早く 早く帰ってきて

男たちは影のように地面から沸き上がり
音も立てずトムに掴みかかった

「首をしめろ 静かにやれ しめ殺せ 30
カケスのせいで鷹を捕り逃すようなへまはするな」

五対一で入り乱れ闘っていると
田舎者が一人中庭に入ってきた

のろのろと足を引きずる野良着の男
だが喧嘩は妙薬 男なら誰だって分かるだろう

男は急に若返り 背筋を伸ばして 35
まるで虎のように闘いの中に飛び込んだ

暗がりの中で掴み合った
揉み合いの中ではピストルは使えない

敵を狙って放った銃弾が 40
味方の頭を撃ち抜くかもしれないから

だがトムが息を切らして言った「撃て ディック 撃つんだ
撃て さもないと二人とも縛り首だ

撃て 今だ」 ディックは後ろに飛び退いた
銃を構え 引き金を引き その銃声に

男たちは狼狽え 四方に散った 45
銃弾がトム・キングの心臓を撃ち抜いた

・ ・ ・ ・ ・
ディック・ターピンは煙を吐くピストルを落とした
五人の男たちはその際にターピンを捕らえた

身を低く屈めてピストルを構えた五人の男たちは 50
こうしてディック・ターピンを生け捕った

捕らえろ 縛り上げろと男たちは

酒場で麦酒^{エール}を呷りながら得意気に話しをした

ディックは鳥の囀りのように優しく口笛を吹いた
暗い馬小屋でつなぎ綱が切れた

ディックはナイチンゲールのように優しく口笛を吹いた 55
馬の尾が風を切る音が聞こえた

五人の男たちが見る限り 天国にも地獄にも逃げ道は無い
ディックの行く先は タイバーンの絞首台のみ

このままでは死あるのみ だがもう一度 60
ディックは口笛を吹いた まるで家の戸口で恋人に呼びかけるように

五人の男たちは 生け捕りにしたディックを嘲笑った
突然 五人の背後のドアが蹴破られた

あの馬小屋から うねるような^{いかづち}雷の音をたて
ブラック・ベスが現れて 五人の男たちを蹴散らした

ディックはその鞍に飛び乗った 蹄が跳ねた石が 65
青い炎を閃かせ 男たちの獲物は逃げ去った

II.

道の丸石を踏み鳴らし ノーザン・ゲートを抜けて
その夜 男は駈けた 逃げる亡霊のように 付きまとう宿命の獵犬から

クラックスカル広場を過ぎる時 ハイゲート・ヒースを過ぎる時 追手の声が聞こえたが 70
男は駈けた 忘れるために ただ忘れるために 己の心の中の獵犬を

紅色に火照った黒馬ベスは 行き先目ざして飛ぶ鳥のようにエンフィールド通りを駈けた
だが乗り手の男は重荷を抱えていた もがき苦しむ魂の中に

拍車も鞭も要らなかった ただ暗い嵐の中を運ばれていった
男は駈けた 大嵐に見舞われ宿命の風を帆に受ける船のように

男は駈けた 達し難い目的のために 昨夜のロンドンから遠く離れ 75
ヨークの塔に囲まれ 朝陽を浴びて目覚めるために

男は駈けた 別の男になるために 過去の自分を捨てるために
追われる男はまるで雲のよう 追う男はまるで風のよう

追われる男と追う男は並んで駈けた 昇ったばかりの陽の光を浴びる頃には
別の男になろうなど 馬鹿げた夢だと分かるだろう 80

眠りについた幾つもの小さな村や静まり返った田舎道は
大きな蹄の音に目を覚ましたが 亡霊のようなその乗り手の姿を見ることはなかった

人々には何も聞こえず 何も見えない ただ地を叩く蹄の音が近づいてくる
闇夜を 高貴なる追剥が駈け抜けていく

人々は目を覚まし 道端に面した戸口に駈け寄った 真夜中に見えたのは
グレート・ノース通りをうねる波のように駈けていく一頭の雌馬 85

姿形の見えぬ暗闇に飛ぶ火花 蹄が蹴り上げられた小石が放つ閃光
上を見上げる男の顔が星明かりに照らされるのが見え そして消えた

人々は三百ヤード向こうから騒々しい追手の叫び声を聞いた
湯気立つほどに汗をかき ミッドランドの土埃にまみれた十四人の追手 90

騒々しい群衆の中を通り過ぎるとき 星の光が男たちの銃床を照らした
だが追われる男の雲のごとき姿のすぐ後ろで 亡霊のごとき追手の姿は風のように消え失せた

男は駈けた ノッティンガム城壁のそばを過ぎる時 シャーウッドの大枝が
グレート・ノース通りに巣くう亡霊たちのように頭上に迫った

バウトリーを過ぎる頃 追手はみな遙か彼方に引き離されたが
一人だけ男に付きまとう者があった 風のように姿も見せず 95

北へ駈けた 漆黒の闇夜に荒地が浮かび上がった
ドン川とダーウェント川が憂鬱な記憶の歌を男にうたって聞かせた

北へ北へ駈けた 姿の見えないトレント川 ウーズ川 エア川の歌声は
祈りの言葉よりも心地よく 男の耳に届いた 100

水音は聞こえても 川は男の喉の渴きを癒してはくれなかった
物言わぬ影が一つ グレート・ノース通りを駈ける男を追ってきた

遂に夜が明け 赤く染まりゆく空にヨークの塔が次々とそびえ立つのが見えた
ベスはまるで波が砕けるように男を乗せたまま倒れ 息絶えた

男は溝の中に横たわるバスに寄り添い その愛しい額に口づけをした
影は風のように通り過ぎ 男とバスを置き去りにした

105

まどろみ
微睡の中で男は 目指し続けた街並みを見た
ロンドンの街から逃れた だが己の意識から逃れられはしなかった

ミックル・ゲートに大股で近づく男を咎める者は誰もいなかった
奇妙な陽の光の中で 男はもう一人の自分に出会った

110

男はゲートに立つその恐ろしい姿に大股で近づいた
それは夜明けの光が血で染めた不気味な手を男にのばした

誰にも見えず誰にも聞こえない地獄の入口ゲートに立ち それは言った
「よく来た よくぞここまで駆けた だが俺を出し抜くことなどできはしない」

(宮原牧子訳)